



Title	「世界献血者デー」における日本赤十字社の取り組み
Author(s)	紀野, 修一; 早坂, 勤
Citation	目で見えるWHO. 2024, 90, p. 24-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/99625">https://doi.org/10.18910/99625</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「世界献血者デー」における日本赤十字社の取り組み



日本赤十字社 業務執行理事(血液事業本部長)  
**紀野 修一** (きの しゅういち)

北海道出身。旭川大学医学部医学科卒業。旭川医科大学研究科博士課程修了。旭川医科大学病院准教授(臨床検査・輸血部 部長)を経て、2014年から日本赤十字社に勤務。2023年4月から現職。



日本赤十字社 血液事業本部 経営企画部次長  
**早坂 勤** (はやさか つとむ)

宮城県出身。1985年日本赤十字社入社 東北エリアの赤十字血液センターにおいて、献血推進業務を歴任。2011年3月11日の東北大地震の際にも、輸血用血液製剤の安定供給のため尽力。

## 1 「世界献血者デー」とは

毎年、6月14日は「世界献血者デー」です。

2005年の第58回世界保健総会において正式に制定され、安全な血液製剤の必要性を啓発し、自発的かつ無償の献血にご協力いただいている方々に感謝する日として、毎年恒例のグローバルイベントになっています。

ちなみに、6月14日は、オーストリアの生物学者・医師で、近代輸血の「創始者」とされるカール・ラントシュタイナー(1868-1943)の誕生日です。ラントシュタイナーは1901年にABO式血液型を発見し、血液型の近代的な分類システムを開発しました。これにより、血液型不適合輸血による死亡事故が劇的に減少し、輸血の安全性が向上しました。

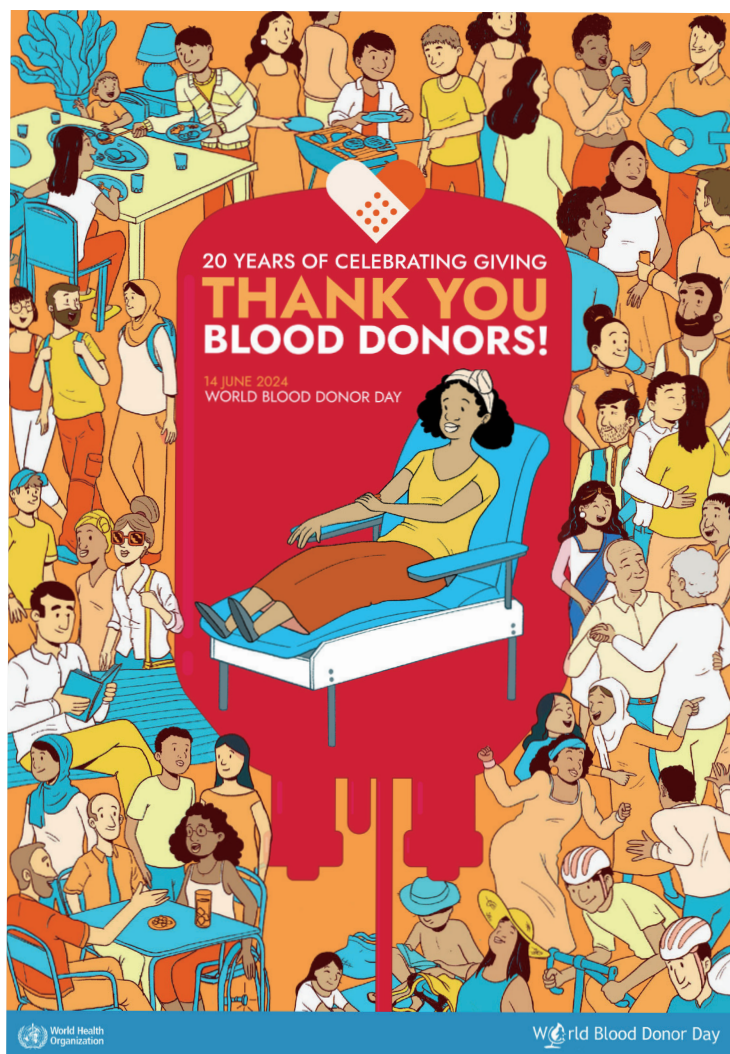
今年(2024年)は、「世界献血者デー」が始まって20年目にあたり、「20 years of celebrating giving: thank you blood donors! (祝! 世界献血者デー 20周年: 献血者の皆様に感謝!)(仮訳)」というテーマのもと、全世界が心をつなげて、日頃から献血にご協力いただいている方々に感謝する日となりました。世界各地で様々な催しが開催され、未来に向けて、すべての国々で安全な血液製剤が使用できるようになるための絶好の機会となりました。

## 2 日本における献血の状況

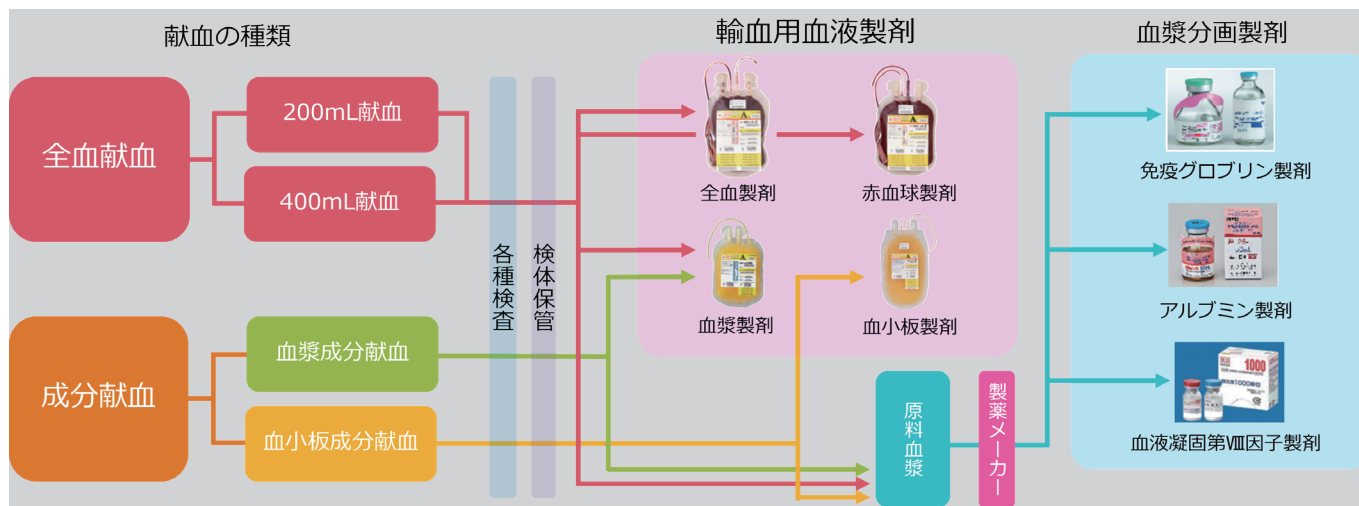
日本では、1964年8月21日に「献血の推進について」が閣議決定され、

1974年には輸血用血液製剤のすべてを献血で確保できる体制となりました。

2023年度は553万人もの多くの方に献血会場に足を運んでいただきましたが、



① 2024年「世界献血者デー」ポスター (出典: WHOホームページ)



② 献血でいただいた血液の流れ (作成：日本赤十字社)

すべての方が献血できるわけではありません。献血当日の体調、病気や服薬の有無、最近の行動履歴などについて回答してもらい、さらにヘモグロビン値が採血基準に適合しているかを調べます。その結果、来場者の9.7%にあたる53.7万人の方には当日の献血をお控えいただくことになりました。また、献血された血液には高感度のウイルス検査などを実施し、安全な血液製剤の製造基準に適合しないと判断された約7.3万人分の血液は、輸血用血液製剤を造るためには使用することができませんでした。このような理由により、必要とされる献血血液を安定的に確保するには、実際に献血できる人より多くの方に献血会場に足を運んでいただく必要があります。

皆様の献血によりいただいた血液からは、輸血用血液製剤および血漿分画製剤（血液から造られる薬）という2種類の血液製剤が製造されています。

輸血は、手術や外傷の治療に使用されていると思われがちですが、その大半はがんや血液疾患などの治療に使用されて

います。一方、血漿分画製剤は、血友病や自己免疫性疾患などの治療に使用されており、特に免疫グロブリン製剤については、近年、神経系の難治性疾患の治療効果が明らかにされたことにともない、需要が増加しています。

### 3 2024年世界献血者デーの取り組み

#### 1) 全国的な広報展開

日本赤十字社では、「世界献血者デー」と同日に公開された映画「ディア・ファミリー」とのタイアップ企画により、映画上映前に献血啓発用のCMの映写や、映画館でタイアップチラシを配布させていただくことで、「世界献血者デー」の広報を行いました。

また、人の往来が多い全国の主要駅構内において、令和6年6月10日（月）から1週間程度、デジタルサイネージによる献血PR動画を流し、多くの方々に「世界献血者デー」を知ってもらうPRを行いました。

#### 2) 献血会場におけるイベント

全国の献血会場においては、日頃から献血にご協力いただいている方々に感謝を伝えるためのイベントを実施しました。

東京都においては、「東京都学生献血推進連盟」がボランティア活動を実施しました。「東京都学生献血推進連盟」は、都内の大学に在学している大学生や都内在住の大学生により組織された献血推進団体です。特に若い世代の献血に対する意欲の増進を目標として、主に街頭での献血会場において、献血協力の呼びかけや、来場者の案内・接遇などのボランティア活動を行っています。

例年、6月14日の「世界献血者デー」にあわせ、パネル展示や献血会場でのボランティア活動を行っています。今年は東京都墨田区の「献血ルームfeel」において、献血にご協力いただいた方々への飲料の提供や、献血協力に感謝を伝えるメッセージカードのプレゼント、また、「東京都学生献血推進連盟」のSNS投稿を見て来場いただいた方々への記念品のプレゼント、といった活動を展開しました。





- ③渋谷駅（東急田園都市線改札外）ビッグサイネージにおける「世界献血者デー」のPR（撮影：日本赤十字社）  
 ④東京都「献血ルームfeel」における学生ボランティアによる献血者へ飲料の提供の様子（撮影：日本赤十字社）  
 ⑤石川県「献血ルーム ル・キューブ」における石川ミリオンスタース村井投手による献血協力の様子（撮影：日本赤十字社）

石川県の献血ルーム「ル・キューブ」においては、プロ野球独立リーグ・日本海リーグ「石川ミリオンスタース」の選手や県内の大学生が金沢市の近江町市場前などの街頭で、献血を呼びかける啓発活動を展開しました。石川県の献血者数は、能登半島地震の影響もあり、2023年度は2024年度に比べて減少しており、若い世代も減少傾向にあります。「石川ミリオンスタース」からは、金沢市出身の村井拓海投手（22才）、滋賀県長浜市出身の香水（かすい）晴貴投手（25才）、そして、県学生献血推進委員会のメンバ

ーが参加して、買い物されているお客さんや道行く人たちにポケットティッシュを手渡ししながら、「献血にご協力をお願いします！」と元気に声をかけてくださっていました。さらに、村井投手には初めての献血にもチャレンジしていただきました。

また、「ポーラ ザ ビューティー金沢有松店」にご協力いただき、女性限定でハンドマッサージの無料サービスや、石川県栄養士会のご協力により、鉄分が効果的に摂取できるお食事の試食会も開催できました。

## 4 まとめ

日本赤十字社は、「世界献血者デー」を契機に、改めて、献血にご協力いただいている方々に対する感謝の気持ちを持ち続けることの大切さ、そして、「血液製剤を必要としている方の尊い生命を救うため、需要に応じた献血血液を安定的に確保し、安全性・品質向上に取り組み、献血者の皆様の思いを届けます」という血液事業の基本理念に真摯に向き合うこととしています。